

アムダリヤ流域におけるクシャン期仏教遺跡の探査 —ウズベキスタン共和国テルメズ市南部のズルマラ仏塔の調査(2020)—

紺野 英二 立正大学文学部特任講師

岩本 篤志 立正大学文学部准教授

池上 悟 立正大学文学部教授

シャプラト・シャイドラエフ テルメズ国立大学教授

アクマル・ウルマソフ ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所研究員

Investigation on Buddhist Sites of the Kushan Period at the Oxus River Basin: Reserch on the Zurmala Stupa in Uzbekistan (2020)

KONNO, Eiji Lecturer, Department of History, Faculty of Letters, Risscho University

IWAMOTO, Atsushi Associate Professor, Department of History, Faculty of Letters, Risscho University

IKEGAMI, Satoru Professor, Department of History, Faculty of Letters, Risscho University

SHAYDULLAEV, Shapulat Professor, Department of History, Termez State University

ULMASOV, Akmal Scientific employee, Restorator, Fine art institute of Academy of Sciences of Uzbekistan

1. はじめに

ウズベキスタン共和国南東部のスルハンダリヤ州テルメズ市にはクシャン期創建と思われる仏教遺跡が集中して存在する。それらの研究は、当地の歴史や北伝した仏教の展開のみならず、中央アジアの美術史や建築史においても重要である。立正大学は、2016年からテルメズ考古博物館と、2018年からはテルメズ大学と提携し、クシャン期創建とされるズルマラ仏塔の調査に従事してきた。

とりわけ2018、2019年度におこなった合同発掘調査では塔の周辺の試掘坑から、クシャン朝カニシュカ1世時期のものを含む10点のコインが出土し、仏塔築造時の基盤層も確認できた。この結果は仏塔の基壇の規模や建立時期を推測する重要な手がかりといえる。

また2020年度は、それまでの活動をふまえ、「ウズベキスタンにおける仏教文化遺産の調査・保護に関する国際貢献事業」(文化庁委託・文化遺産保護国際貢献事業：専門家交流)の成果として、ズルマラ仏塔の保存と観光資源の両立のための報告書をまとめた。本稿では2年間の発掘成果とズルマラ仏塔の保存を目的とした報告書の概要を示す。

2. ズルマラ仏塔周辺の建造物・遺物の発掘調査

2018年9月に、テルメズ国立大学の協力のもと、

仏塔周辺で初めての試掘調査をおこなった。その位置は、同年3月に地中レーダーをおこなった成果を考慮して実施した。とりわけ反応のあった仏塔西側にトレンチを設定した。なお、仏塔は2018～2019年の調査時には周辺の120m四方を限って設置された遊歩道で区画されており、それを図面に反映した(図1)。

2018年の調査では、仏塔周辺に所在が想定される建物跡を探すことを目的として、試掘範囲を設定した。なお、仏塔の基壇を調査することがその年代や様式を考える上で重要であることを認識しつつも、その崩壊を誘発せぬように、試掘坑は、仏塔よりやや離れた西側に設定した。

当初、仏塔の西側のみトレンチ(1tr、図1記載)を設定し掘削する予定であったが、仏塔北方にもう1カ所の試掘坑(2tr)を設定し、計2カ所での掘削を開始した。調査中、当初の試掘坑との土層の比較も含め、仏塔よりさらに西の綿花畑付近に土層の堆積を観察するための試掘坑(3tr)を、さらに仏塔の東方にも試掘坑(4tr)を設定した。

2018年の調査では土層の堆積状況がおおよそ把握できた。仏塔付近は長期間綿花畑に使用されていたことから、地表面(GL)から80cmの深さまでは、粘土を主体とした硬く締まった土層であった。この粘土層の下層は、遺物の包含層となり、彩色されたイスラム陶器やさらに古い遺物が混入する層となっていた(GL-110cmまで)。この遺物包含層の下層には、焼

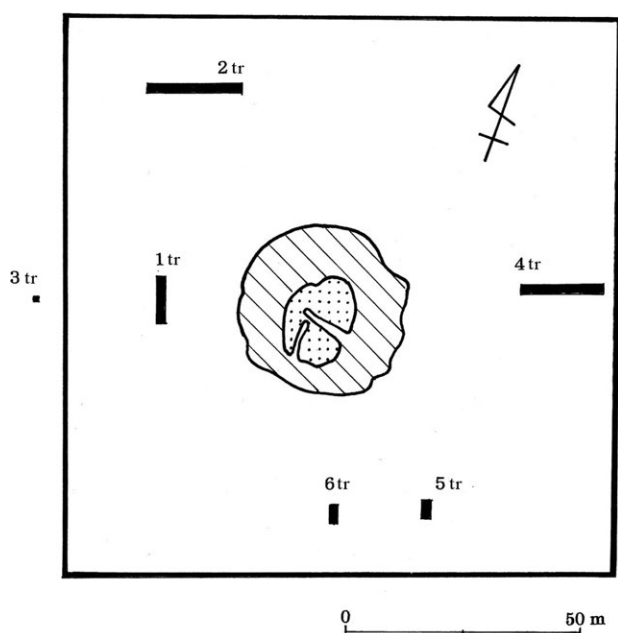


図1 トレンチ配置図(本文中の1tr~6trに対応、4trは2019年時の発掘範囲、立正大学作図)

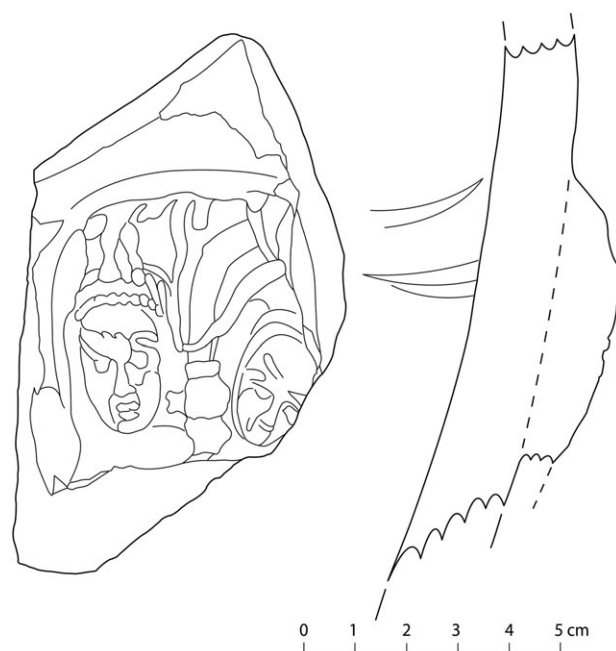


図2 テラコッタ(2018年出土品の一例、Ulmasov 作図)

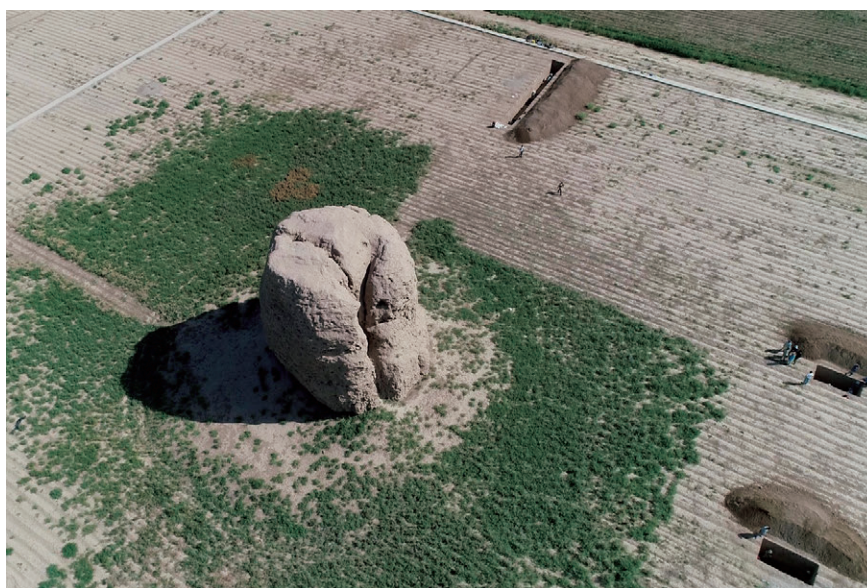


図3 2019年発掘の様子(立正大学撮影)

土や炭化物の混ざる層が認められ(GL-160 cm まで)、被熱した日干しレンガ片などが検出された。また、この層より検出されたほとんどの遺物は、クシャン期のものと考えられた(図2)。

2019年の調査では、前年の調査で土器片の出土が比較的多く確認された仏塔東側の第4トレンチを、東側に16m延長し、総長18mとした(図3)。トレンチ拡張の目的のひとつは、ブルマラ仏塔築造時の基盤層を確認することであり、最終的に地表面から280cmまで掘り下げた。また2018年に手付かずであった仏塔南側に、幅2m、長さ4mの第5、6トレンチ(5tr、

6tr)を設定した。

第4トレンチの西端は、仏塔基壇斜面裾から25m離れているものの、約10mの範囲で、仏塔基壇の崩壊にともなう土砂の流出と思われる堆積を確認できた。また230cmの深さ以下には遺物が包含されないことから、230~240cm付近が仏塔築造時の基盤層と判断される。第4トレンチで確認できた土層堆積状況は、地表面から110~120cmの深さまで4層に区分でき、上位の硬砂質の褐色土の2層は耕作土、この下位の硬質褐色土の2層は畑地造成に伴って他から持ち込まれた客土と判断された(図4、図の右側が西端。8、9、10、

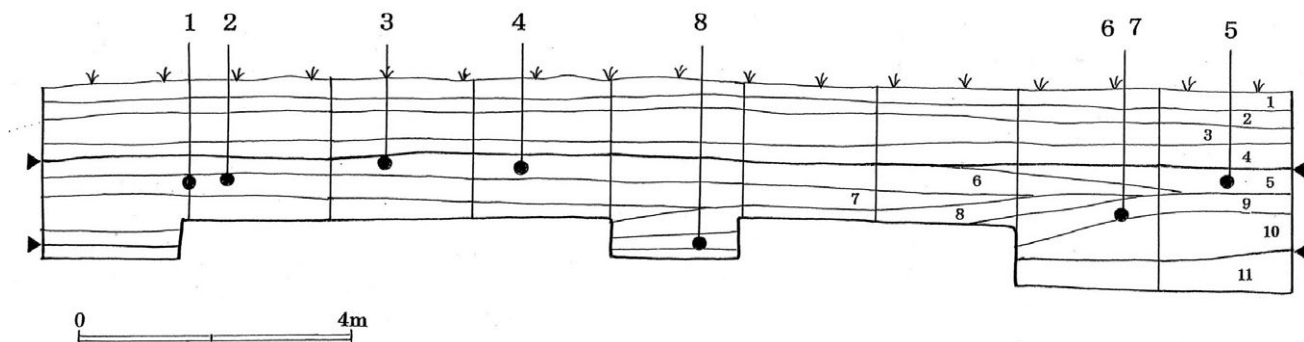


図4 第4トレンチ土層堆積状況とコインの出土層(コインの出土位置については本文中では「数字」で示した、立正大学作図)

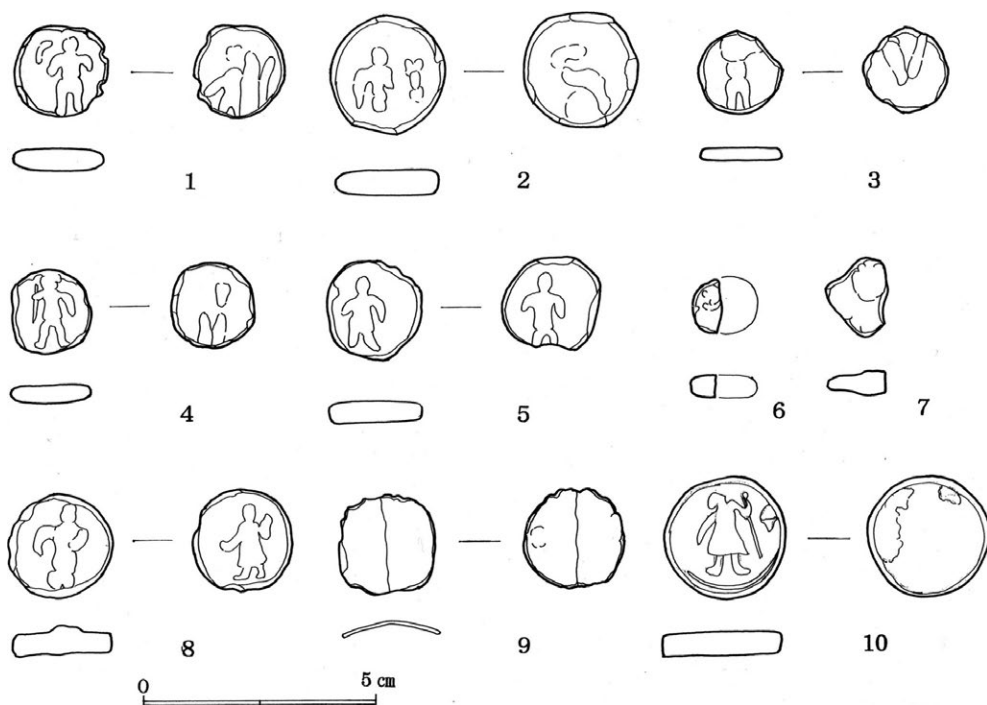


図5 出土コイン一覧(立正大学作図)

11の層が仏塔方面からの堆積)。遺物はこの客土の下位に、地山までの130 cmほどの厚さで堆積した粘質褐色土層中から出土したものである。仏塔の南側に設定した第5、6トレンチについては、第5トレンチで250 cm、第6トレンチで270 cmまで掘り下げ、やはり深さ230~240 cm付近で基盤層が確認できた。

3. 出土遺物

ズルマラ仏塔東側の第4トレンチは、幅2 m、長さ18 m、深さ220~280 cmを掘り下げた。その下位堆積土中から出土した遺物は土器片を主体として数百点を数え、うち100点ほどが実測可能であった。また第5トレンチからも、多くの土器片が確認できた。土器片以外では石灰岩の碎片、銅製コイン、鉄製品数点、食物残渣と考えられる動物骨片、炭化物があり、上部

の客土中よりはガラス片、鉄線片なども出土した。

コインについては、第4トレンチから8点、第5トレンチから2点の出土を確認できた。第4トレンチ出土の8点のコインは、遺物包含層のうち、上位層からの出土が目立ち、〔6〕・〔7〕・〔8〕の3点は相対的に下位層からの出土であった(図4: ●が〔1〕~〔8〕の出土位置)。第5トレンチ出土の〔9〕は140 cmの深さから、〔10〕は230 cmの深さから出土した。総数10個のコインは直径18~25 mm、厚さ1~5 mmの大きさで、断片化している〔6〕・〔7〕を含めると、重さは1.4~17.5 gでいずれも銅貨とみられる(図5)。鑄により図文は不明瞭な部分が多いが、〔8〕および〔10〕などはカニシュカ1世期の所産と思われる。例えば〔10〕のクリーニング後の写真によれば、表面はカニシュカ1世の立像、裏面は所謂ミトラ(銘文はミイロ)



図6 カニシュカ1世銅貨(図5の〔10〕に相当、左：表、右：裏)

の立像で、同王の銅貨の一種であった(図6)。

土器資料に、完全な形を留めるものではなく、全て破片であった。肩部に木の葉形の押し型文を有する壺形土器、外面に動物の顔面を表した鉢形土器、アンフォラ形の壺形土器、中央に円錐状の突起を有する小形の蓋形土器などが注目される。また灯明皿は、小形の単純口縁で幅広の口縁でないもの、低平な形状のものが注目され、いずれもクシャン朝の古期に遡及する可能性が高い。

また第4、5トレンチからは、かなりの量の焼成レンガ片が出土しており、第4トレンチ東端部では破片を寄せ集めた状態で確認された。焼成レンガの破片は厚さ5cmほどで、型をもちいて成形した痕跡が確認された。また出土した石灰岩片の中には平坦面を留める破片や段を造作した資料も若干数確認された。これらは、焼成レンガおよび石灰岩は、ズルマラ仏塔の構築材として使用されたほか、仏塔の基壇部の仕上げにもちいられたと想定される。

また第4トレンチの遺物包含層中に遺存した10点ほどの炭化物の放射性炭素分析をおこなった結果、総じてAD85～240年の較正年代を示した。この放射性炭素分析の結果から仏塔が創建された時期は2世紀前後と考え得る。

ただしこの2年の発掘調査では、塔が増築された可能性や周囲の構造物の存在を完全に否定できるものではない。今後、仏塔の崩壊を防ぎつつ、基壇部分をどのように調査するかが課題といえる。

4. ウズベキスタンにおける仏教文化遺産の調査・保護に関する国際貢献事業

ズルマラ仏塔は盗掘坑や風化などにより劣化が進ん

でいるだけでなく、大きく2つに割れかねない危機的な状態にあり、保存方法は早急に考える必要がある。立正大学は、仏塔の周辺の発掘調査に先行あるいは平行して、文献や古写真にもとづく調査、立地環境・材質調査、土木工学的調査などもおこなっており、2021年3月中にズルマラ仏塔の保存と観光資源の両立のための現段階での提案を刊行予定である。執筆者と内容の概要は以下の通りである。

高原利幸(金沢工業大学 准教授)および塚脇真二(金沢大学 教授)は、地盤工学的な観点から仏塔の保存方法の提言を示した。池上および岩本、シャイドラエフ、ウルマソフは、本稿で示したようなテルメズ国立大学との発掘活動と、それ以前の共同調査の概要の執筆を担当した。またウルマソフは、現時点で想定されうる仏塔の本来の外装について出土遺物から見解を示した。

今後はズルマラ仏塔をスルハンダリヤ州の仏教遺跡として学術的に正確に位置づけるのみならず、テルメズ市や共和国文化省などの意見も総合し、適切な保存と観光利用の両立をはかれるよう、より具体的な提言につなげることを目指している。

■参考文献

- ・立正大学ウズベキスタン学術調査隊編 2020『ズルマラ仏塔発掘概要報告書 2019』立正大学。
- ・紺野英二・池上悟ほか 2020「アムダリヤ流域におけるクシャン期仏教遺跡の探査—ウズベキスタン南部のズルマラ仏塔の調査(2019)」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』71-74頁 日本西アジア考古学会。

※なお、本稿は上記の報告書の概要を示したものであるため、重複部分が多い。また、数値などに若干の誤差があるが、『ズルマラ仏塔発掘概要報告書 2019』の表記に統一している。